

ちぬ

CHINU

Vol.
64



特集

大阪体育大学

— 改革の変遷と未来に向けて —

野田理事長メッセージ

「時代のニーズに応え、発展を続ける
大阪体育大学」

スポーツ科学部への名称変更に関する期待

原田宗彦 (大阪体育大学学長)

組織風土改革プロジェクトからの報告



時代のニーズに応え、発展を続ける大阪体育大学

理事長 野田賢治



令和7(2025)年大阪体育大学は、創立60周年を迎える。

当初“大阪産業大学”で申請するべく準備を進めていた。現に図書館には、大阪産業大学のシールを貼った本が多数存在している。産業体育(生産体育)を中心にすえて、経営や経済分野へ広げていく考えがあったようである。産業と体育を組み合わせること自体、当時としては、とても斬新な発想であり、体育・スポーツのフロンティアをめざす大学として面目躍如たるものであった。しかし、カリキュラムと大学名の整合が取れていないという理由で許可されず、やむなく、大阪体育大学でスタートしたのは周知のとおりである。

開学後、産業体育研究所を立ち上げ、京阪電気鉄道株式会社や株式会社ダイセル等、関西の大手企業とタイアップし、社員の健康管理を目的に体力測定を行い、運動指導も合わせて行っていた。1980年代に入り、日本はいわゆるバブル経済期に突入する。各社の健康保険組合も社員の健康維持・管理に今まで以上にお金を使えるようになり、その機会をとらえて産業体育研究所を法人化し独立させる準備に入った。法人化に必要な1億円も簡単

に集まりそうな勢いであった。その頃、大学の移転が決まり、法人化計画は、一旦棚上げとなり、平成元(1989)年4月、熊取学舎が開校。18歳人口がピークを迎え、経営的に見てもとても良いタイミングでの開校となった。ところがその年の12月、終値が史上最高額を付けた日経平均株価は、わずか9か月あまりの間に半値近い水準にまで暴落。いわゆる“バブル崩壊”である。法人化に協力を約束してくれていた企業も、次々に撤退していき、法人化計画は、あえなく無期延期となった。

移転と同時に、大阪体育大学附属福祉専門学校を設立し、将来の介護人材ニーズに応えるべく介護福祉士の養成を開始。卒業と同時に国家資格が取得でき、初任給は4年制大学と同水準であったことから、多くの受験生を得ることができた。その後、雨後の筍のように養成校が設立されていくが、介護福祉士の待遇は思っていた以上には上がらなかった。専門学校の受験生は減り続けたが、平成14(2002)年に短期大学部を経て、健康福祉学部として大阪体育大学の2番目の学部となった。そして、平成27(2015)年、大学開学50周年に教育学部に改組したことは、ご存じのとおりである。

18歳人口は、ピーク時の205万人であったものが、現在は112万人と55%まで落ち込んでおり、すでに全国の大学の半数が定員割れを起こしている。一方で都市部の大学では、定員を増やしているところもあり、二極化がさらに進んでいる。本学においても、受験生の減少は顕著でピーク時の3分の1にまで落ち込んでいる。昨年度は、あわや定員割れかと思うところまできていた。本学のように体育・スポーツの専門大学として、伝統と実績がある大学は定員確保に苦勞することはないだろうと、勝手に思い込んでいたのだ。見通しが甘かったと言わざるを得ない。幸い今年度は、推薦基準を見直すことによって、両学部で受験生を増やすことができた。しかし、それで安泰かと言うことは決してない。常に見直し、改革を進める必要がある。さらに、体育学部をスポーツ科学部へ名称変更。2学科を1学科にし、6つのコースを設置した。この学科再編は、大変将来性を感じさせる。体育・スポーツを中心に、さまざまな分野に展開することができる。価値観が多様化し、変化の激しい時代のニーズに応えることができると確信している。

これまででもこれからも皆が知恵を出し合い発展していくことを期待している。

大阪体育大学は令和6年4月に体育学部をスポーツ科学部に名称変更します。私立学校を取り巻く環境は年々厳しくなる一方です。多分に漏れず大阪体育大学もそのあおりを受けています。改革の一手として、開学より謳ってきた体育学部の名称を変更するに至った経緯や改革の歴史を野田理事長と原田学長に語っていただきました。

スポーツ科学部への名称変更にも寄せる期待

大阪体育大学学長 原田宗彦

昭和40(1965)年の開学以来、本学において学部名称が変更されることはなかった。しかしながら、少子化等の影響によって半数の私立大学が定員割れになる一方、本学の実志願者数は、令和元(2019)年の1,185人が、2022年には1,012人に減少するなど、大学経営は危険水域に突入した。さらにコロナ禍の影響もあり、今何か手を打たなければさらなる衰退は避けられないという状況に追い込まれた。

そこで手を打ったのが、カリキュラムの改革である。私が赴任した2021年に、当時の神崎浩体育学部長(現副学長)を座長とする「カリキュラム改革タスクフォース」を設置し、主に学科の再編について検討を依頼した。その時は、学部名称は据え置いたままで1学部4学科案が提案されたが、この案は、学科の定員割れという事態を回避するために理事会で否決され、日の目を見ることはなかった。しかしながら、この時に醸成された改革に向けた機運は、後に1学部1学科で入試を行うという「大括り入試」(late specialization)の導入と学部名称の変更によって結実することになる。

2022年の3月には、当時の富山浩三健康・スポーツマネジメント学科長(現学長補佐)を委員長とするカリキュラム専門委員会が始動し、新しい「スポーツ科学部」の検討が始まった。その時に行った2023年度入試では、実志願者数が1,000人を割る894人に減少するなど、開学以来の危機的状況に直面した。その一方、2024年度入試においては、学部名称の変更という組織イノベーションや、テレビCMの実施による新しいプロモーション、そして従来の指定校推薦の評定平均値の見直しと「スポーツ指定校推薦」の導入といった入試制度の改革によって学生募集は順調に進み、年内に定員充足のめどが立つなど、改革の成果が見え始めている。

今後は、スポーツ科学部のカリキュラムのさらなる改革が必要とされる。現段階では、小学校教育、保健体育教育、幼児教育、特別支援教育という4つのコースを提供する教育学部の募集が良い結果を生んでいるだけに、スポーツ科学部においても、体育学部時代から継承した良き伝統を堅持しつつ、次の時代に対応した柔軟なカリキュラム改革を継続しなくてはならない。

そして2023年度には、すでにある大体大ビジョン2031をベースに、「学生が伸びる大学」をコンセプトとして掲げた「中期経営計画」(2023-2027)を策定し、その実現に向けた動きをスタートさせた。そのひとつが、植木章三副学長を座長としたデジタルスポーツ論開発タスクフォースの設置であり、現在は「ラーニングコモンズ×デジタルスポーツスクエア」の整備を進めている。さらに今後は、教員免許以外にスポーツ科学部で取得可能な資格として、アスレチックトレーニングのカリキュラムの強化や、本学のブランドイメージの中核をなす運動部の強化にも取り組む予定である。来春スタートするスポーツ科学部の完成年度は2027年であるが、現在は、このタイミングを見据えたさらなる改革に向けた準備を進めながら、存在感のある大学づくりの実現をめざしていきたい。



組織風土改革プロジェクトからの報告

組織風土改革プロジェクトの活動にご賛同、ご協力いただき誠にありがとうございます。

今年度も組織風土改革プロジェクトは、行動指針・「SFGs」の推進、業務スキル基準表の検討を軸としてさまざまな活動を行ってきました。

組織風土をより良くしたで賞

- SFGsに、より親しみを持っていただくため、チェックリストで行動を可視化。
- 目標達成者全員を表彰（今年度は1月26日に締め切り）

業務スキル基準表

- 各部署の業務の把握のため、総務部と共同でひな型を作成
- 令和5(2023)年度より本格的に作成開始

通信教育 / webSDセミナー

- 各人の目的と職階に合わせて、通信教育を展開
- 今年度から「e-JINZAI for university」の受講が可能となりました

2023年度 SDセミナー QuonAcademy 受講状況

講座名	講座数	参加者数(延べ)
実務スキル	6講座	7人
ジェネリックスキル	5講座	8人
マネジメントスキル	3講座	3人
合計	14講座	18人



SD活動の促進に向けた取り組み SD研修会の実施

- 自己研鑽を促進する取り組み(申し込み者7名)
- 全職員対象の研修会を実施予定(3月14日)



写真は昨年度の研修会

ノー残業 day メール配信

- 毎週金曜日にノー残業dayメールを配信
- 野田三郎先生、野田敏彦先生が応援しています



私にとっての SFGs

普段から SFGs を心掛けていただいている職員の方に想いをつづっていただきました。記念すべき 1 人目は庶務部学長室担当の佐藤さんです。

SFGs (Soshiki Fudo Goals (組織風土ゴールズ) の頭文字と最後の s を採り、エス・エフ・ジーズ) とは、2022 年 3 月 17 日に組織風土改革プロジェクトが考えた“学校法人浪商学園 事務職員行動指針を浸透させ、浪商学園の風土をより良くすることをめざした 17 の目標”です。

1 人だけ行動しても意味がないと思っている方がいるか

もしれませんが、決してそうではありません。現代は、変化を繰り返し、挑戦・進化を続ける組織であることが望ましい時代です。

例えば、仕事を「当事者」だと思っている人数が極端に少なくなると、職場をより良くしようとする人や言動に対して、環境の変化によるストレスを嫌うため変化を受け入れられず、排除する同調意識が生まれます。結果、組織は不活性な状態となり、新しいアイデアが生まれなくなります。しかし、一人ひとりが「SFGs 4 当事者意識を持つ」を意識して小さなことでも行動すれば、新しいアイデアが生まれ、組織はより良くなっていきます。



私も、SFGs の浸透に貢献したいと考え、日々の生活の中でできることから取り組んでいます。

例えば、

- ・高等教育に関連したサイトやニュース、本を読む
- ・毎朝、今日 1 日の楽しみや目標を考える
- ・毎朝 6 時までには起きる

などの取り組みをしています。

SFGs の浸透は、決して簡単なことではありませんが、一人ひとりの小さな行動が、大きな変化をもたらす可能性があります。これからも SFGs の浸透に貢献していくため、小さなことでも、できることから取り組んでいきたいと考えています。

(庶務部／学長室担当 佐藤浩輔)



Topics



大阪体育大学（大学院・体育学部・教育学部）

<https://www.ouhs.jp>

●ハンドボール部女子がインカレ 10 連覇

令和5（2023）年11月の全日本学生選手権で10大会連続11回目の優勝。関西スポーツ賞を受賞しました。楠本繁生監督は日本代表監督としてもアジア大会初優勝。



激闘を制したハンドボール部女子



大阪体育大学主催セミナーでは、本学の取り組みを紹介

●スポーツ等総合展「SPORTEC」に出展

令和5年8月、東京ビッグサイトで開催された「SPORTEC」に東京、早稲田大学など14大学とともに出展し、研究、社会貢献活動を紹介。同展は原田宗彦学長が実行委員長を務め約4万人が来場しました。



大阪体育大学浪商中学校・高等学校

<http://www.ouhs-school.jp>

●ICT化の推進

ICT機器の整備を行いました。プロジェクターは投影画面を左・中央・右へと簡単にスライドすることができるものに入れ替え、黒板はホワイトボードに変更し、より快適に教育活動を行うことができるようになりました。



新プロジェクター導入



全国中学校ハンドボール大会優勝

●全国ハンドボール大会春夏連覇

「第18回春の全国中学生大会」、「第52回全国中学校ハンドボール大会」で優勝し、初めて春夏連覇することができました。運営の皆様、選手たちをサポートしてくださった保護者の皆様、先生方、ありがとうございました。



大阪青凌中学校・高等学校

<https://www.osakaseiryu.jp>

●文部科学大臣賞 藤田壮真さん受賞

夏期課題として取り組んだ第73回全国小・中学校作文コンクールにおいて、中学3年生藤田壮真さんの作文が、文部科学大臣賞に選ばれました。藤田さんは、12月2日に東京で行われた全国表彰式に出席し、自ら作文を朗読・披露しました。



受賞式で朗読をする藤田さん



大阪府の代表として参加

●全国高校生英語ディベート大会に出場

放課後 MT (マネジメントタイム) の一環として、英語ディベート活動に取り組んできた高校生4名が、12月16～17日に栃木県で開催された全国高校生英語ディベート大会に、大阪府代表として参加しました。生徒たちにとっては、悔しさの残る、貴重な体験となった2日間でした。



大阪体育大学浪商幼稚園

<https://www.ouhs.jp/kinder>

●第74回運動会

青空の下、東雲運動広場で運動会を開催しました。子どもたちの一生懸命な姿に参観の皆様から盛大な拍手をいただきました。胸に輝くご褒美の金メダルよりも子どもの誇らしげな笑顔の方がより輝いていました。



年少の「ちびっこトトロ てておいで〜」



べったんべったんもちになれ〜

●年神様 来てください

年中年少児の「もちになれ」の大合唱に力をもらい、年長児がお餅をつきました。ついた餅は、新年の幸福や恵みをもたらす年神様に幼稚園によりついていたただけるように鏡餅にしました。



今月の一枚

鏡餅 (大阪体育大学浪商幼稚園)

幼稚園でつくられた大きな鏡餅です。浪商幼稚園では毎年、このような立派な鏡餅をこしらえております。

撮影：松井美奈子 園長



学校法人浪商学園 学園報 *ちぬ* No.064 令和6年2月22日発行

発行者：学校法人浪商学園 総務部企画室／発行責任者：野田達彦

〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

TEL 072-479-3111 FAX 072-453-8972

学園ホームページ：<https://www.namishogakuen.jp/>

印刷・製本：株式会社毎日新聞大阪センター

学園広報誌 *ちぬ* の由来

浪商学園に勤務する教職員の交流を図るために発行された学園広報誌「ちぬ」。

茨木時代は校舎前（現在の浪商幼稚園前）を流れる安威川より名を冠した「あいがわ」でしたが、熊取移転に伴い「ちぬ」と改められました。

「ちぬ（茅渚）」とは奈良時代から見える和泉地方の呼称。「古事記」神武天皇条にも見え、大阪湾を「ちぬの海」ともいい、浪商中学校・高等学校、大阪青凌中学校・高等学校の校歌でも歌われています。